

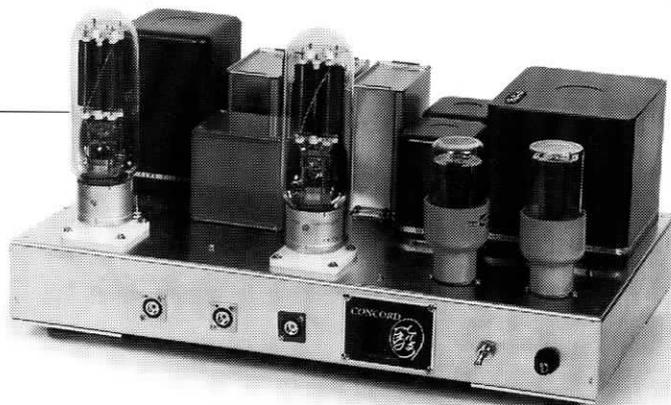


失われた音を求めて 直熱管アンプ放浪記

トランス入力採用、CD再生用単段プッシュプル構成

845プッシュプル CDバッファアンプ

佐久間 駿 SAKUMA Susumu



序章

路地先のえのみの落葉（らくよう）がしげくなった。拾い集めていると遠い日の事が胸を過ぎる。父が竹箒でよく庭を掃いていた。ちょうど僕くらいの年の頃だ。若い頃は母に似ていると言われた。還暦を過ぎた今、父にそっくりだと言われる。父が逝って17年、母が果てて13年。さまざまな想いを胸の中の引き出しに仕舞い込んで生きてきた。まるで、バド・パウエルの「ブルース・イン・ザ・クロゼット」のように。

夜半、フランス映画『列車に乗った男』に目をこらす。

フランスロック界のカリスマ、ジョニー・アリディが、映画『髪結いの亭主』を演じたジャン・ロシュフォールと共演した名画だ。銀行強盗を企む流れ者と定年退職した元教師の束の間の交流を、匂い立つような哀愁で描いている。黄昏迫る廃屋で元教師が男に拳銃を撃たせてもらう。撃ち終えた元教師に男がうろ覚えの詩の一節を口遊ぶ。

新橋（ポン・ヌフ）で私は会っ

た
遠い歌が聞こえてくる…

「ここだけ覚えてる。続きを？」と男。元教師が引き継ぐ。

新橋で私は会った
平底船や地下鉄の駅の
遠い歌が聞こえてくる

新橋で私は会った
杖もなく犬も札もなく
あわれみをこう男に
彼の前を人波が流れる

新橋で私は会った
すりへった石だたみにすわり
くり返しつぶやく
古（いにしえ）の私の光と同じ
夢に

翌朝、仲間の裏切り、心臓手術の失敗で、あえなく命を落とす二人なのだが、このワン・シーン、この映画屈指の名場面だ。銀行強盗を企む流れ者にルイ・アラゴン（Louis Aragon）の詩の一節を語らせた監督の意図に、ただ言葉もない。大分夜も更けた。最後のタバコに火をつける。風が出てき

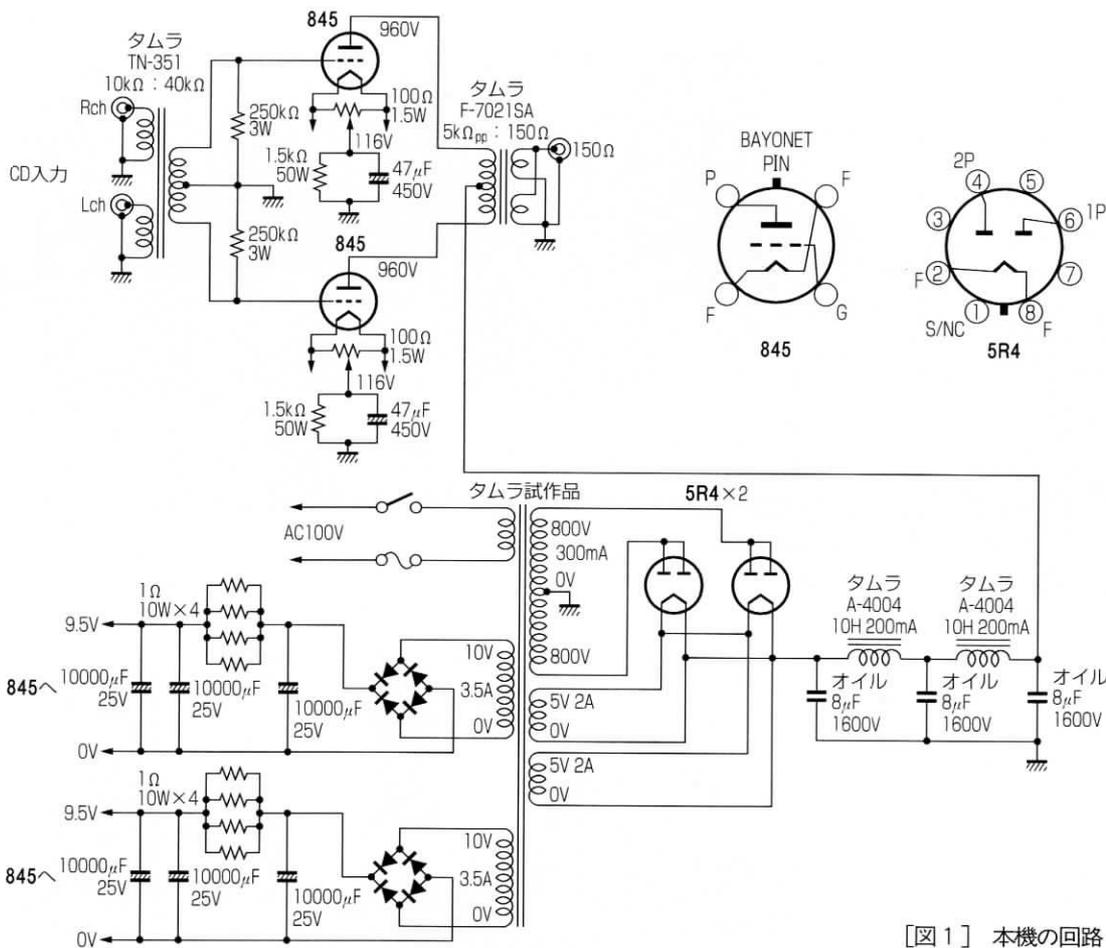
た。明日の朝には店先の路地一面に、えのみの葉が舞い落ちていることだろう。

パトリス・ルコント（Patrice Leconte）
監督『列車に乗った男』L'Homme du Train
]/日本語字幕：寺尾次郎

845プッシュプル バッファアンプ

部品棚を片づけていると手つかずのトランスが何個か出てきた。中には作ってから20年近くも見捨てられていたものもある。本機に使用したパワートランスがそれだ。当時のタムラ製作所技術課長塩沢氏が手塩にかけた作品だ。それと出力トランス。山口氏の手によるものだが、これとてもう作られてからゆうに10年近い。

オーダーするときには明日にでも作品に取りかかる意気込みなのだが、品物ができあがる頃になると、他のアンプにうつつをぬかして、つついそのままにしてしまうのが常だ。スーパーやコンビニで売られている食料品ではないがトランスとて、もしかしたら賞味期限があるかもしれない。アンプに組み込まれ通電されることを前提として作られたものだ。箱



【図1】 本機の回路

た裸のローサーPM4で鳴らしていた。とても鮮度の良い音でジョンのジャズギターにも似た鮮やかなパッセージを見事に再生していたが、今はタンノイの同軸38cmで聴いている。このタンノイもワーフェデルやローサーと同じく身ぐるみ剥いである。店の入口横のモノラル・フルトラックオープンリールの下に裸で置いてあるだけなのだが、いい音で鳴る。このタンノイで聴くジョンのギターは、先ほどまで鳴らしていた裸のローサーPM4とは大分趣が違う。

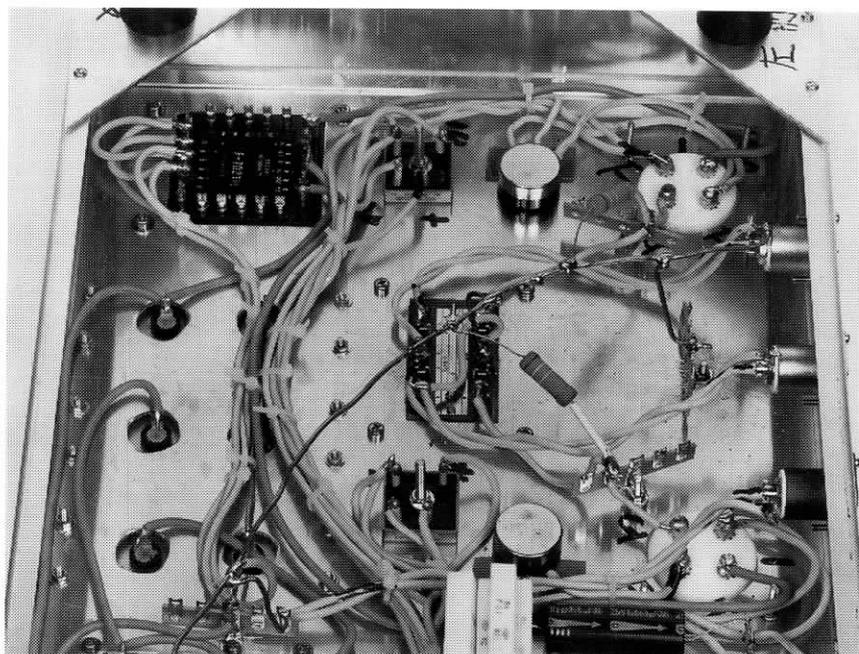
38cmという大口径からの影響もあると思うのだが、音にくぐもりが加わって、より陰影美に富んでいる。あの不世出のギタリスト、ジュリアン・ブリームそっくりの演奏に聴こえる。僕が愛してやまない彼のバッハのリュート組曲第2番かと耳を疑ってしまいそうだ。

ワーフェデル、ローサーそしてタンノイとイギリス産の3種のスピーカーを裸で鳴らしているが、さすがにイギリス。どれもがそれぞれ個性に富んだ音で僕の耳を楽しませてくれる。

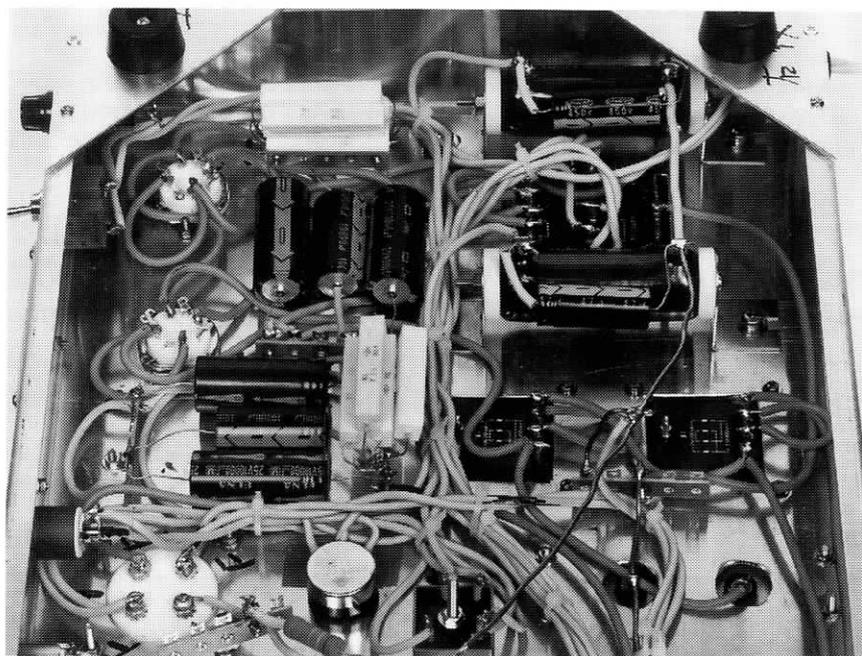
このタンノイユニットの由来について書いてみよう。岡田先生という僕の主治医が使っていたものだ。東京から館山に引っ越して来て、地元の病院に勤務していたが、2年ほどで、また東京に帰ってしまった。請われて週に一度、元の病院に視察に来るのだが、館山に来るたびに僕の所に寄りハンバーグを食べ、オーディオ談義に花が咲く。ジャズレコードとオーディオのマニアで東京の自宅には膨大なレコードとハイ・エンドのオーディオ機器を所有している。館山を引き上げる際、ばかでかいタンノイのスピーカーシステムを処分

していった。自宅のオーディオ・ルームにはJBLの4343がデンと鎮座しているためタンノイを置く場所がないとのこと。僕の友人の長田君がそれを引き取り、モノラル党の彼が片チャンのユニットを僕にくれた。それがこのスピーカーの由来だ。

岡田先生とくれば、彼が参加したアンプ製作会のことに触れないわけにはいかないだろう。9月末に3日間にわたり我がコンコルドで開催したイベントだ。『MJ無線と実験』12月号においてリポーターの山崎江実氏の名文が掲載されたので、今更くどくど蒸し返す気はさらさらないが、思えば実に楽しく有意義なイベントだった。医者の不養生から風邪をこじらせ、ゴホンゴホン咳き込みながら、聴診器をハンダごてに持ち換えて奮闘した岡田先生。まったくの偶然



入力端子付近と、出力管のソケット近くに1L5Pのラグ端子を立て、増幅部の配線を行っている。ソケット下にバイアス調整用VR、シリコンブリッジダイオードを配置



高圧を扱う本機は、整流回路の5R4とオイルコンデンサーなど、吟味したパーツの使用が決め手。845のバイアス調整用CRは、ホーロー抵抗に47 μ F 450Vを近接して配置

することが必須条件だ。生半可なパーツは決して使用しないこと。これを怠ると思わぬ事故につながり命を落とすはめになる。

845をただパワーアンプに使用してほめちぎっているのでは、まだまだ手ぬるい。フォノイコライザーアンプやCDバッファアンプにまで使用してこそ、はじめてこの球の空恐ろしいほどの真価が

見えてくる。

次の機会に304TLをプッシュプルで用いたCDバッファアンプを目論んでいる。

僕の考えているアンプに「究極」という言葉は存在しない。究極などと思ったら終わりだ。次の作品のアイデアが浮かんでこない。

本機のS/Nだが完璧に近い。ハムもノイズも皆無だ。前機845

ドライブ845シングルもかなりS/Nは良かったが、本機はさらにその上をいく。これはドライブ段からの影響がまったくない単段プッシュプルの恩恵だろう。211と出力トランスF-2021を使用して16 Ω 出力の場合はおそらくフィラメントをAC点火で用いてもかなりのS/Nが稼げると思う。パワーアンプの前に一段、ゲインの小さなパワーアンプを置く。CDを再生する場合、絶対に必要なことだ。その小さな出力のパワーアンプを僕はCDバッファアンプと名付けている。

試聴記

4P55シングル+6G-B8シングル2チャンネルアンプ「清水(きよみず)」を友として音を出してみよう。スピーカーは前面にアルテック同軸2ウェイ950-8B、上面にWE720Aドライバーを配したクレデンザ風スピーカーシステムを使用。まずはジャズボーカルから『コルトレーン・アンド・ハートマン』の「ラッシュ・ライフ」, 「マイ・ワン・アンド・オンリー・ラブ」, 『バラード・アンド・バートン』の「宵のひととき」, 「バン・バン」, そしてもう一枚『サミー・デヴィス・アンド・ロリーリンダ・アルメイダ』から「丘に住む人々」, 「霧深き日」, いい声だ。ハートマンもバートンもサミー・デヴィスも、まるですぐそこで歌っているようだ。このように聴こえることが重要だ。オーディオが原音を越える最も重要な要素と言える。原音以上のリアリティを覚えるのは、自分のすぐそこで歌ったり弾いたり吹いたりしていることを、スピーカーをまったく意識しないで音楽に没頭できるかどうかだろう。ス



テレオでは無理だ。位相で人の耳を混乱させている。うまく出来たモノラルシステムだけが原音を越えた音楽再生をリスナーに提供してくれる。

ボーカルをもう少し続けよう。五輪真弓の「時計」、初期のイブ・モンタンの「セーヌの花」、ミルバの「ヴェノス・アイレスで私は死のう」、カルロス・ガルデルの「想いのとどく日」、そしてマリア・カラスのジョコンダから「自殺」、クリフォード・ブラウンとサラ・ヴォーンの「ジム」。

以前、僕を訪ねてきたプロのミクサーの言葉が胸を過ぎる。「歌っている本人に聴かせてやりたいですね。この音を聴けば自分の歌に自信を持つでしょう」。スピーカーをアルテックA5に代え、そしてアンプを845ドライブ845ppパワーアンプ(MJ1989年10月号、『直熱管アンプの世界』紀伊國屋書店)に久々に灯を入れギンギンのハード・バップを何曲か聴いてみた。バド・パウエルを2曲、『ブルース・イン・ザ・クローゼット』から「ビ・バップ」、『パリス・セッション』から同じく「ビ・バップ」、いつも304TLppパワーアンプと845ドライブ845シ

ングルCDバッファアンプで定番のように聴いているが、845プッシュプルCDバッファアンプと845ドライブ845ppパワーアンプで聴く「ビ・バップ」はすさまじかった。こっちの方がもっと強靱だ。高音域のうるさい音がまったく出ないのでいくらでもボリュームが上げられる。このボリュームをいくら上げてもうるさく聴こえないということも音楽再生における重要な要素だ。

高音が出ないからうるさく感じられない、と思う人がいるかもしれないが、とんでもない。高音の出ない音ほどうるさく感じる音はない。絶妙にコントロールされた高音が大事なのだ。高音が絶妙にコントロールされてこそ、大音量の音楽再生を耳が受け入れてくれる。クリフォード・ブラウンの「ジョー・ドウ」、ジャッキー・マクレーンの「マイナー・アプリヘンション」、デージー、ゲッツ、スティットの「ダーク・アイズ」、ドナルド・バードの「ヒュエゴ」、パウエルとパーカーの「ラウンド・ミッドナイト」、そしてマイルスとロリンズの「ディグ」。思いつき、1943年、第二次世界大戦中のフルトヴェングラーとベル

リンフィルによるベートーヴェンの5番と7番も聴いた。それと愛するクララ・ハスキルのピアノでモーツァルトのピアノコンチェルト24番。かつてヨーロッパやアメリカに赴き、そこでのオーディオ・コンサートで「Concorde-01」と異名を取った845ドライブ845ppパワーアンプ。老いたりと言えどその底力は計り知れないものがあつた。これほどのパワーアンプとバッテリーを組んだ845CDバッファアンプにとっても至福の至りだったかも知れない。

終章

あつという間に桜が散り、風のごとくゴールデンウィークが去り、居直るだけ居直った夏がやっと姿を消し、秋が来るかと思つたら、もう師走だ。

身ぐるみ剥がれたタンノイが鳴っている。コルトレーンとエヴァンズが奏でる「ステラ・バイ・スターライト」そして「ブルー・イン・グリーン」。

ポン・ヌフで私は会つた
すり減った石畳に座り...

つと、口遊んでみた。

失なわれた音を求めて

続直熱管アンプ放浪記



古典的な直熱型真空管とトランス結合回路を使用した独自のオーディオアンプの紹介と、それを用いた音楽再生にまつわるエッセイ。

佐久間 駿 著

A5判・240ページ
定価3360円(本体3200円)
ISBN 4-416-10206-2

レストラン・コンコルド音楽日記

音楽三昧放浪記



チャーリー・パーカー、バド・パウエル、ビリー・ホリデーの果てに日本の歌の心を見出した……。ジャズ、クラシックファン、オーディオファンにおすすめする一冊。

佐久間 駿 著

四六判・上製・240ページ
定価2310円(本体2200円)
ISBN4-416-10500-2

誠文堂新光社発行 お求めはお近くの書店、または小社販売部へ 販売部 TEL: 03-5800-5780/FAX03-5800-5781